

御 館 跡 Ⅲ

2006

新潟県長岡市教育委員会

御 館 跡 Ⅲ

国道 404 号関係発掘調査報告書

2006

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県長岡市小国町千谷沢字鶴之島居平にある御館跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は国道404号拡幅工事に伴い、新潟県長岡地域振興局から長岡市が受託したもので、長岡市教育委員会が平成17年8月19日～10月7日に行った。
- 3 報告書作成にかかわる作業は平成17年10月から平成18年2月を行った。
- 4 出土遺物及び測量図面・写真・観察データは、一括して長岡市教育委員会が保管・管理している。
- 5 遺物の注記は御館跡の略号と調査年の西暦05を入れて「オタテ05」とし、出土地点・層位を記した。
- 6 遺構番号は種別にかかわりなく通し番号とした。
- 7 遺物番号は種別にかかわりなく通し番号とした。本文及び観察表、図版、写真図版の番号はすべて一致している。
- 8 土層の土色観察は「新版 標準土色帖」〔農林水産省農林水産技術会議事務局監修1967〕を用いた。
- 9 引用文献は著者及び発行年を文中に〔　　〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 本書の執筆は池田淳子(長岡市教育委員会)が行い、図版などの作成は整理作業員小川薫の協力を得た。
- 11 図版の縮尺、トーンが示す事柄や方位については、各図版に示している。
- 12 遺跡名は、平成15年度の報告書では「御館遺跡」としたが、御館という通称名のある館跡であり、本報告書からは「御館跡」と呼称する。
- 13 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。(敬称略 五十音順)

鶴之島集落 新潟県長岡地域振興局地域整備部 新潟県文化行政課 新潟県埋蔵文化財調査事業団

小田由美子 春日真実 鶴巻康志 三ツ井朋子

目 次

第1章 序 説	
1 調査にいたる経緯	1
2 調査と整理作業	1
第2章 周辺の歴史と環境	
1 集落の歴史	2
2 周辺の現況	2
3 「御館」に関する文献資料	3
第3章 調査の概要	
1 グリッド・調査区の設定	4
2 基本層序	4
第4章 遺 構	
1 概観	4
2 記述の方法	4
3 各説	6
第5章 遺 物	
1 概観	7
2 記述の方法	7
3 各説	8
第6章 まとめ	
1 御館跡の鉄鍋について	10
2 御館の規模と堀・土塁の形状について	10
3 御館の要害について	10
《引用・参考文献》	11
《要 約》	11
《觀察表》	12
挿図目次	
第1図	平成16年度確認調査トレンド位置図
第2図	明治30年代の土地更正図と御館の位置
第3図	調査位置周辺の状況
第4図	グリッド配置図 基本層序
第5図	中世の遺物分布図
図版目次	
国版1	遺跡全体図
国版2	遺構集中区
国版3	個別遺構図
国版4	出土遺物
写真図版目次	
写真図版1	御館跡上空写真
写真図版2	基本層序 検出状況
写真図版3	遺構断面 完掘状況
写真図版4	出土遺物

第1章 序 説

1 検査にいたる経緯

御館跡は長岡市小国町千谷沢字鷺之島居平に所在し、古くから中世の館跡として知られてきた遺跡である。これまでに3回発掘調査が行なわれており、本報告は4回目の調査である。

昭和59年に国道404号建設に伴って発掘調査を行い、堀と土塁の内側に井戸や掘立柱建物数棟が確認でき、さらに平安時代の集落と重なっていることが判明した〔小国町教育委員会1985〕。平成14年・15年度には国道を拡幅するために発掘調査を行い、昭和59年時の調査と同様に、平安時代・中世の遺構、遺物が確認できた〔小国町教育委員会2003〕。

国道の拡幅はさらに北側にも計画されており、平成16年度には用地買収が終わった地点について、遺跡範囲の広がりを確認するための調査を行った（第1図）。調査地は御館跡の堀の外側にあたるが、2T、4Tから平安時代の土器が出土し、1～4T、7Tでは遺物包含層が確認できた。5T、6Tは厚い粘土層があり、遺跡の範囲外であることがわかった。この結果、平安時代の遺物と遺構が確認できた範囲（900 m²）で発掘調査が必要になり、新潟県柏崎地域振興局（平成17年4月以降は市町村合併に伴い長岡地域振興局）と協議を行い、平成17年度に本発掘調査を行って報告書を刊行することで合意した。

2 検査と整理作業

（1）検査体制

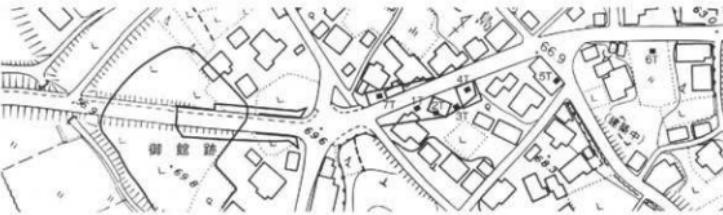
現地調査の体制・期間は以下のとおりである。

○確認調査	（平成16年度）
調査期間	平成16年6月9日
調査主体	小国町教育委員会（教育長 高橋 實）
調査担当	小国町教育委員会教育課主事 池田 淳子
調査補助	小国町教育委員会臨時職員 小川 焕

○本調査	（平成17年度）
調査期間	平成17年8月19日～10月7日
調査主体	長岡市教育委員会（教育長 笠輪 春彦）
調査担当	長岡市教育委員会 科学博物館学芸員 池田 淳子

（2）整理体制

出土遺物の水洗・注記作業、接合・復元などの基礎整理、図版トレース、遺物写真撮影など報告書作成にかかる作業は平成17年10月～平成18年2月に行った。



第2章 周辺の歴史と環境

1 集落の歴史

御館の地は、これまでの発掘調査により縄文時代には人々が暮らしていた痕跡があることが分かっている。その後館が造営される以前には平安時代の集落が存在し、14世紀後半ごろに館が築かれ、16世紀代には廃絶したことが出土土器の時期などから推測できる。その後は19世紀ごろの陶磁器が確認されており、江戸時代後期には数件建物があったと思われる。現在集落の戸数は80戸であるが、江戸時代には7戸しかなかったという伝えがある〔小国町 1976〕。集落内には寺屋敷という地名や觀音堂が残っていることから、中世までは寺があったと推測されているが、詳細は不明である。江戸時代後期には「コウタク寺」という寺が建立されていたことも伝えられている。

現在千谷沢には龍光院という寺がある（第3図）。15世紀半ばに開山したとされており、小国氏が岩室村に移ったあとで小国城主となったと伝えられる佐藤氏の位牌が安置されている。鷺之島にあった寺がここに移ったとも考えられている。神社は白山神社があるが、勅詔年は不明である。

鷺之島は明治22年の市町村制施行前は千谷沢村に属していた。その後市町村合併の推進により、千谷沢村は旧越路町側である塙山村との合併の方向に進んだが、様々な経緯があって、千谷沢村内の3集落が小国町、2集落が越路町へと分割合併された。小国町に合併したのが千谷沢、原小屋、鷺之島の3集落である。2005年4月には小国町・越路町はともに合併して長岡市となっている。

2 周辺の現況

御館跡は鷺之島集落の南端に位置しており、国道建設前は畠地であった。南側には濱海川がかつて蛇行して形成した断崖がある。他三方には土塁と堀があったが、明治30年代の土地更正図では館跡の地割は残るが、宅地や畠になっている（第2図）。土塁は崩されているが、堀の輪郭をみることができる。

館跡全域を調査していないが、昭和59年当時の地形などからは方形区画ではなく、東側に張り出した部分をもっていた可能性があり、山崎正治氏は東側に鍵の手（折衷み）の土塁と水濠を設けた区画と指摘されている〔山崎 1989〕。

集落内には「おて（大手）」「御屋敷」と呼ばれる地区があり、集落ほぼ全体に館に関係ある地名や通称が残っている〔長谷川・山崎 1976〕。しかし大半が現在は宅地であり、明確な痕跡は認められない。これまで発掘調査を行った場所は「中御館」と呼ばれていた地点である。「御館」と呼ばれる場所は「中御館」の約100m北側にあるが、堀や土塁の残存は認められず、土地更正図からみても詳細は不明である。今回発掘調査した地点において、中世の遺構が認められたことで、「中御館」外側にも中世の生活区域があつたことが明らかになった。

3 「御館」に関する文献資料

今のところ、中世～近世の史料は確認できていない。明治23～26年に記された『温古の契』〔大平 1890〕には、「小立山の古城跡 割羽郡小国保千谷沢小立山の古城跡は源頼政の一族佐藤家代々の居城なり。寛正年中当主太賀太夫頼尚世の無常を観じ……」とあり、「小立山の古城」と記されているのが御

館を指すと考えられる。

『千谷沢村誌』には「鷺之島城 本村支部鷺之島居平西方にあり、平城なり。東西三拾六間、南北三十間、御館という。・・・・慶長年間堀久太郎秀治の麾下佐藤主膳信就之に居る。」と記されている。「東西三拾六間、南北三十間」は $65 \times 54m$ であり、発掘調査により判明した御館の堀を除いた規模とほぼ同じである。

『小国町史』〔小国町 1976〕では長谷川正氏・山崎正治氏が周辺の地形・地名を詳細に調べ、館に関係ある地名が屋号として残っていることを記されており、御館は「中御館」と呼ばれていたとされている〔小国町 2003 第4図参照〕。

ほかには『越後野志』〔小田島 1815〕や千谷沢龍光院にある「御館城主の位牌」(江戸時代と伝えられる)などの資料があるが、明確な文献資料がなく、また館跡の一部を調査したのみであるため不明な点が多いといわざるを得ない状況である。



第2図 明治三十年代の土地更正図と御館跡の位置

第3章 調査の概要

1 グリッド・調査区の設定(第4図)

今回発掘調査を行った地点は、これまでの調査区の北東に位置し、グリッドは平成14年・15年の調査時に設定した10m方眼を延長して設定した。10mの区画内には2m方眼の小グリッドを設け、北東隅を1、南西隅を25とした。大グリッドとの組み合わせにより15L10、18N18などと示した。

調査区は現道路の東側をA区とし、西側を2つに分けて北からB区、C区とした。全地区とも以前は宅地であったため、包含層が削られていた部分も多く、下水管などによるかく乱も認められた。

2 基本層序(第4図)

A区とB・C区では層序が異なり、B・C区は遺構確認面までが現地表から1m以上と深い。調査区の幅が2~3mと狭いため、状況はよく把握できないが、A区からB・C区の方向に大きく下がる地形になっている可能性がある。

A区はII層が包含層であるが、大半は宅地造成・取り壊し時に削られたと推定される。平安時代の遺物が中心であるが、出土量は少なかった。

B・C区はIII層が包含層であり、平安時代・中世の遺物が出土した。面積は狭いが、包含層には宅地造成の影響はなく、良好な状態で土器が出土した。15年調査区14K地点の層序と対応する(第2図③小国町教委2003参照)。

第4章 遺構

1 概観

検出された遺構は掘立柱建物2棟、柱穴50基、井戸2基、土坑9基、不明遺構1基である。A区中央部分に集中しており、V層が確認面である。B・C区は遺物の出土は多かったが、遺構は確認できなかった。

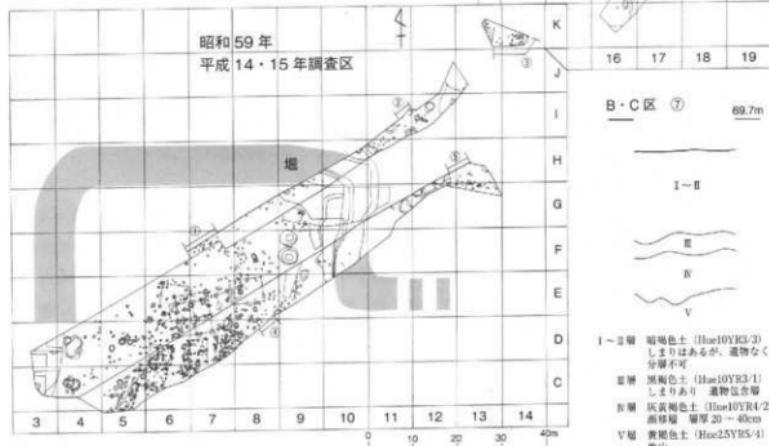
時期については、掘立柱建物と井戸は覆土や周辺の遺物から中世の可能性があるが、他は判断が困難であった。

2 記述の方法

掘立柱建物をSB、土坑をSK、井戸をSE、柱穴をPの記号を付して記した。遺構番号は層位、種別に関係なく通し番号である。以下では主要な遺構について報告する。計測値は観察表に記載した。

3 各説

(1) 掘立柱建物(図版2)



第4図 グリッド配置図 基本層序

柱穴群は18M区付近に集中していたが、調査区が細長いこともあり、建物跡を復元することは困難であった。掘立柱建物が確認できたのは2棟である。

SB1

位置：18M区 規模：2×2間以上、3×5m以上

柱穴：掘り方の平面規模は22～50cm、確認面からの深さの平均は36cmである。

時期・その他：過去の調査で検出された館内の掘立柱建物の主軸方向とはほぼ同じである。

SB2

位置：18M区 規模：1×4間以上、4.3×6m以上

柱穴：P7は長径32cm、短径26cm、深さ54cmで、覆土はややしまりがなく、土師器の破片と鉄滓2点が出土した。P17が長径32cm、短径30cm、深さ24.7cmである。覆土から鉄滓が3点出土した。

時期・その他：近接するSE18は鉄滓や中世土師器などが出土した中世の井戸であり、本建物も中世に属する可能性が高いと考える。

(2) 土坑（図版2）

上端の長径が50cm以上になるものを土坑とした。9基確認したが、遺物の出土がなく、時期不明のものが大半である。遺物が出土した土坑について記載する。

SK13 17M区に位置する。平面形は隅丸方形で、隣接する現代の土坑と覆土が似ていることもあり、時期は不明である。覆土上層から珠洲焼の破片が1点出土した。

SK15 18N区に位置する。現代のかく乱土坑に半分切られているが、平面形は円形である。確認面からの深さは40cmで、覆土は4層に分かれ。全体的にしまりが強く、2層から須恵器や珠洲焼破片が出土した。覆土1層からは18世紀後半ごろの近世陶磁器類も出土した。

SK20 18O区に位置する。平面形は梢円形で、深さは20cmである。覆土は地山土混じりの暗褐色土で、炭を多少含んでしまがない。覆土上層から土師器破片と珠洲焼片口鉢底部片が出土した。

(3) 井戸

上坑のうち、深さが1mを超えるものを井戸とした。確認できたのは2基である。

SE14 18N区に位置する。径120cmほどの円形で素掘りである。崩落の可能性があったため深さは140cmほどで掘削をやめているが、それよりも深くなると推定できる。覆土は全体的にしまりがあり、1層の下部からは土師器破片10数点が出土した。

SE18 18N区に位置する。径111cmの円形で素掘りである。深さは180cmで地山と思われる黄褐色土が確認できた。上面は宅地跡のかく乱により一部削られていた。覆土は黒褐色土に一部ブロック状の地山が混ざっており、全体的にややしまりがある。確認面から100cm程度のところで土師器・須恵器破片10数点、中世土師器破片2点、赤漆（椀？）破片1点、鉄製品5点（釘4点、鍋の吊耳部分1点）、鉄滓57点、羽口片4点が出土した。

(4) 柱穴

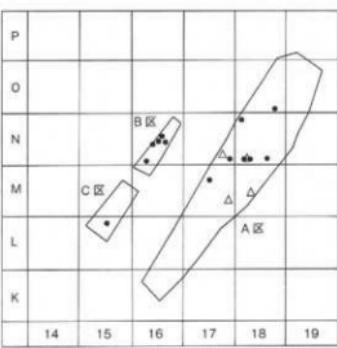
18M区に多く、大半は径20cm、確認面からの深さ20～35cm程度の小さい柱穴であり、柱痕が認められたものはない。P5は長径26cm、短径20cm、深さ31cmで、覆土から羽口が1点出土した。

第5章 遺物

1 概観

コンテナ（サイズ：34×54×27cm）で計2箱の遺物が出土した。平安時代の土器は須恵器、土師器がある。中世の遺物は、青磁、白磁、珠洲焼、土師器の破片のほか鉄製品、鍛冶関連遺物などがある。ほかには縄文時代の土器が5点、近世（18～19世紀）の遺物も少量出土した。

分布状況は、平安時代の土器はA～C区に散発的に見られたが、中世の遺物はA区中央部分とB区で多く出土した（第5図）。



第5図 中世の遺物分布図

2 記述の方法

遺構出土、包含層出土に区分してそれぞれ器種ごとに掲載した。出土点数が少ないため器種分類は行わず、それぞれの特徴を記した。破片資料は細別時期の特定が困難なものが多い。遺物の時期について、白磁は森田分類〔森田1982〕、青磁は上田分類〔上田1982〕、珠洲焼は吉岡編年〔吉岡1994〕を参考にした。

3 各説（図版4）

(1) 遺構出土土器（1～5）

SK15 珠洲焼と須恵器の小破片が出土した。1は珠洲焼で壺か瓶の胴部破片である。2は須恵器壺の胴部破片である。外面は格子目叩き、内面は小破片のため不明であるが、平行當て具痕である。

SE18 土師器破片10数点、黒色土器破片1点、中世土師器破片1点、須恵器壺破片1点、須恵器瓶類破片1点が出土した。図化できる大きさのものはほとんどない。3は黒色土器無台碗の底部で、底部の切り離しは回転糸切りである。4は中世土師器皿の口縁部破片で、クロコ成形で薄いつくりであり、15世紀後半以降のものと考える。

SK20 5は珠洲焼片口鉢の底部である。鉢目の単位は8本で、底部外面は板目である。

(2) 包含層出土土器

縄文時代、平安時代、中世の土器が出土した。縄文時代については小破片であるため図化しなかった。以下では時期ごとに記す。

ア 平安時代

〈土師器・黒色土器〉(6～11)

確認できた器種は無台碗、小壺である。黒色土器は無台碗と思われる小破片が6点あるのみである。6～9は無台碗で、口縁部から底部に向かってゆるく内湾する器形(6～8)と口縁端部がやや外に開

く器形 (9) がある。口径は 12 ~ 13cm である。底部の残る 6 と 8 はいずれも切り離しは回転糸切りである。10・11 は長甕でいずれも口縁部の破片であり、残存は 1/8 程度で口径は推定である。10 は磨耗が著しい。

〈須恵器〉 (12 ~ 14)

確認できた器種は甕、壺である。甕は破片が 10 点で、壺は圓化できない小破片が 1 点のみである。12 は甕の肩部と思われ、外面は格子目叩き、内面は平行當て具痕である。13、14 は甕の胴部破片で、ともに外面は格子目叩きで、内面の當て具痕は 13 が同心円文、14 が平行當て具痕である。

〈灰釉陶器〉 (15)

出土したのは 1 点である。15 は壺の口縁部であり、上端がわずかに外反する。釉はほとんどかかるっていない。

これら平安時代の遺物の時期については、須恵器の食膳具がほとんど見られず、土師器碗が主体となること、土師器碗の形状から 10 世紀初頭前後と考える。

イ 中世

〈青磁〉 (16 ~ 18)

3 点出土し、いずれも口縁部の小破片である。16 は端反りの碗で、17 は口縁部が内湾しており、割れ口に塗が付着している。18 は碗か皿である。釉は 17 と 18 がやや厚く、17 の色は黄色っぽい。胎土は 18 がやや灰色を呈しており、16・17 は白っぽい色である。

〈白磁〉 (19・20)

口縁部破片が 2 点出土した。19 は内湾する中型の皿で口径 10.4cm である。20 もほぼ同じくらいの径になる皿と思われる。2 点の胎土は良く似ており、うすい褐色である。

〈中世土師器〉 (21・22)

ロクロ成形のものが 2 点出土した。21 は口径 7.8cm の皿で器高が低い。22 は底部破片で、底面にわずかに墨書き痕がある。ともに底部の切り離しは回転糸切りである。

〈珠洲焼〉 (23 ~ 26)

23 は片口鉢で口縁内側に広く面をとるタイプである。卸目の単位は 5 本以上になる。24 と 25 は甕か壺の胴部破片である。26 は甕の胴部下半部分である。

〈越前焼〉 (27)

1 点のみ出土した。27 は甕の肩部で黒褐色の自然釉が薄くかかる。

これら中世の遺物の時期は、青磁と白磁は 15 世紀前半ごろである。中世土師器は 21 が 15 世紀前半ごろ、4 や 22 は 15 世紀後半、珠洲焼は 23 が V 期で 15 世紀前半ごろ、27 の越前焼は 15 世紀後半から 16 世紀ごろのものと考える。

(3) 鉄製品・鍛治関連遺物

鉄製品 5 点、鍛治関連遺物（鉄滓 390g、羽口 7 点）である。

ア 鉄製品

28～31 は SE18 から出土した釘である。いずれも断面が四角形である。28～30 は頭部を有し、28 がやや大型で長さは約 6cm である。31 は頭部を欠いており、刀子のなかごの可能性もある。

32 も SE18 出土で、鉄鍋の吊耳部分である。X 線写真撮影を行った結果、2箇所の穴があいており、段を有することがわかった。

これら鉄製品の時期は SE18 出土土器から 15 世紀前半ごろと考える。

イ 鍛治関連遺物

（鉄滓）

SE18 からは 57 点 (242g)、P17 から 3 点 (15.7g)、P7 から 2 点 (124.3g)、包含層から 3 点 (8 g) が出土しており、合計で 65 点 (390g) である。そのうち P7 出土は椀形滓である（写真図版 4-36）。

（羽口）

破片で 7 点出土しており、包含層から 2 点、P5 から 1 点、SE18 から 4 点である。SE18 の 4 点は接合しないが、胎土などから同一個体と思われる。33 は P5 の覆土から出土しており、内径 3cm で鉄滓がわずかに付着している。34 は SE18 出土で外径 8cm、内径 3cm である。鉄滓がわずかに付着している。胎土にはいずれも少量の歯が混入している。

鍛治関連遺物の時期は、SE18 出土土器や周辺の包含層出土土器から 15 世紀前半ごろと考える。

(4) 石製品ほか

砥石が 1 点、寛永通宝が 1 点出土した。35 は裏面が欠損しているが、側面には素材から切り出した擦痕が残る。時期は不明である。

第6章　まとめ

1 御館跡の鉄鍋について

中世には羽釜、鉄鍋、鉄鉢などの鉄製物が生産・消費されていたが、これらは壊れると地金として再利用されるため資料として残ることはきわめて少ない〔五十川1992〕。

新潟県内では、鉄鍋は胎内市（旧中条町）江上館跡、新潟市（旧新津市）内野遺跡、上越市子安遺跡などで出土例があり、14遺跡20例がある〔立木2002〕。時期は14世紀以降と推定されるものである。

鉄鍋の形態は大きく3つに分類されており〔五十川前掲〕、県内では吊耳を持つ鍋Bと内耳鍋と呼ばれる鍋Cが多い。本遺跡の資料は鍋Bの吊耳部分である。時期は船の継続時期やSE18の共伴土器から15世紀前半ごろと考える。

鉄鍋は井戸からほぼ完形に近い形で出土する例が多いことから井戸祭祀に関わる可能性が指摘されており〔立木前掲〕、本遺跡も井戸からの出土であり、こうした事例に一致する。破片資料であり、鉄釘や鉄滓とともに出土しているため、再利用のために取りおかれたものが覆土に混ざったことも考えられたが、出土位置は覆土下層であり、本例も祭祀に関わるもの可能性が高いと考える。

2 御館の規模と堀・土塁の形状について

越後では、明確に堀や土塁を方形にめぐらす城館がみられるのは15世紀からである〔伊藤2002〕。堀あるいは土塁が確認されているのは15例ほどあるが、城館全体を発掘調査した例は少ない。江上館、十日町市伊達八幡館などは規模が大きく、江上館は堀を含めた規模は一辻110m、伊達八幡館主郭は65m×50mである。他例では50～70mの場合が多い〔伊藤前掲〕。

御館は部分的な発掘調査であるが、堀を含めた規模は南北67m、東西78mである。堀は幅7.8m、深さ2.4m、土塁は基底部の幅7.5m、高さ1.9mである。土塁は後世には削られることが多いため明確な事例は少ないが、残存高は1～2mの例が多く、御館の場合は土塁が高く築かれており、堅固な防衛体制をとっていたといえる。御館は県内でも規模の大きい方に属するといえる。

また、方形区画ではなく、折重みの堀・土塁をもっていた可能性については、昭和59年度報告書で指摘されていた〔小国町教委前掲〕が、現存していないため不明な点もある。しかし第2図の土地更正図をみて東側に突出した部分があり、そこが旧道に面しているため、防御施設があったとみることができる。

折重みをもつ山城の例は県内でも少なく、いずれも16世紀末ごろと考えられている〔鳴海2000〕。本遺跡の場合はこれまでの調査では16世紀ごろの遺物は少なく、15世紀前半を中心としている。御館の存在時期については今後の調査を待って検討する必要があろう。

3 御館の要害について

御館の至近の要害と考えられているのは、南側に位置する大沢城、北西に位置する小坂城である。大沢城は長岡市小国町千谷沢字原小屋（第3図参照）にあり、当時は丘陵上にあったが、その後渋海川の瀬替えにより現在のような浮き島状になったとされる。平成8年に農道新設に伴い狭い範囲で確認調査が行われたが、遺構・遺物は確認されなかった。以前から削平・崩落があったと思われる。

小坂城は長岡市（旧越路町）千谷沢字門前に位置し、曲輪や土塁、堀切などが随所に見られる。『温古の茶』〔大平前掲〕により小国氏一族の小坂氏によって築かれたと記される山城である。段丘のほとんどを要塞化した立体的な柵張りと自然の谷を堀とした特異な構造が戦国期城郭としての特徴をよく示しているが、御館との距離をみても同時期の要塞とするには検討する必要がある〔鳴海1998〕。御館とは直線距離で約600m離れており、間には現在は渋海川が流れている。

要害については、当時の地形、水運、周辺の遺跡のありかたなど広い範囲での検討が必要である。

引用・参考文献

- 五十川伸矢 1992 「古代・中世の鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
伊藤啓雄 2002 「中世越後の城館と寺院」「中世北陸の城館と寺院」北陸中世考古学研究会
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
大平与文次 1890 『温古の茶』
小田島尤武 1815 『越後野志』
小田由美子他 2001 『堀越館跡』新潟県教育委員会
立木宏明 2002 「第VII章まとめ 4 内野遺跡出土の鉄鍋について」「内野遺跡発掘調査報告書」新津市教育委員会
長谷川正・山崎正治 1976 「第三章 中世の小国」「小国町史 本文編」新潟県小国町
小国町 1976 『小国町史 本文編』
小国町教育委員会 1985 「御館 発掘調査報告」
小国町教育委員会 2003 「御館遺跡 II」小国町埋蔵文化財調査報告書第4集
鳴海忠夫 1998 「第五章 中世の遺跡と遺物 小坂城跡」「越路町史 資料編 I 原始・古代・中世」
鳴海忠夫 2000 「新潟県津南町今井城跡の柵張り」「北陸の中世城郭」第10号 北陸城郭研究会
森田 魁 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
山崎正治 1989 「柏崎刈羽の古城址」第1集（小国篇）
吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

要 約

- 1 御館跡は新潟県長岡市小国町千谷沢字鷺之島居平に所在する。
- 2 調査範囲は現在の国道404号拡幅部分であり、調査面積は900m²である。
- 3 調査は昭和59年、平成14年、15年に3回にわたって行っており、報告書は59年度分、平成14・15年度分の2冊を刊行している。本書は4回目の調査時の報告書である。
- 4 平安時代は土師器、須恵器が出土し、中世は陶磁器類、珠洲焼、鐵製品、鍛冶関連遺物が出土した。平安時代は10世紀初頭ごろ、中世陶磁器類は15世紀前半を主体とした時期である。
- 5 平安時代の明確な遺構は不明である。中世は掘立柱建物、土坑、井戸がある。
- 6 堀の外側にも中世の遺構が広がっており、鍛冶関連遺物の出土からは近くに鍛冶遺構が存在したものと考える。

遺構観察表

種別	遺構番号	グリッド		長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面標高	覆土	出土遺物	備考		
獨立柱建物												
SB1												
P	21	17	M	3	52	40	52.5	68.71	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	22	17	M	3	22	22	28.7	68.93	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	23	17	M	2	30	28	35.3	68.85	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	24	18	M	22	28	26	34.9	68.9	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	25	18	M	17	30	28	45.4	68.78	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	26	18	M	16	25	25	31	68.89	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	27	18	M	12	40	26	25.5	68.95	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
SB2												
P	31	17	M	7	20	20	15	69.02	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	30	17	M	6	40	36	30.8	68.7	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	17	18	M	21	32	30	24.7	68.92	地山粒子の混ざる 暗褐色土 やや砂質	鉄津3点		
P	25	18	M	17	30	28	45.4	68.78	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	28	18	M	17	22	22	29	68.96	地山粒子の混ざる 暗褐色土			
P	7	18	M	18	32	26	54	68.73	地山粒子の混ざる 暗褐色土	土師器破片1点 鉄津2点		
P	29	18	M	19	21	21	35	68.96				
柱穴・上坑・井戸												
P	5	17	M	4	46	30	31		地山ブロック混じり の暗褐色土	羽II点		
SK	8	17	M	4	134	88	28	69.09		柱あり		
SK	10	18	M	6	82		70.6		なし			
SK	12	18	M	11	152	124	28	68.83		近世陶磁器		
SK	13	17	M	2	92	84	24.4	68.94		珠洲焼破片1点		
SK	15	18	N	15	176	144	40.2	68.72	しま強い。	墨唐器破片1点、珠洲焼破片1点、 近世陶磁器4点		
SK	20	18	O	10	70	44	20			土師器破片1点、珠洲焼底部片1点		
SE	14	18	N	13	120	110	140.5上		暗褐色土主体	土師器破片11点		
SE	18	18	N	25	111	111	180		暗褐色土に地山 ブロック混入	土師器破片10數点、須恵器破片1点、 中世土器破片2点、漆器破片1点、 珠洲焼片1点、鉄釘1点、銅洋57点		

遺物観察表

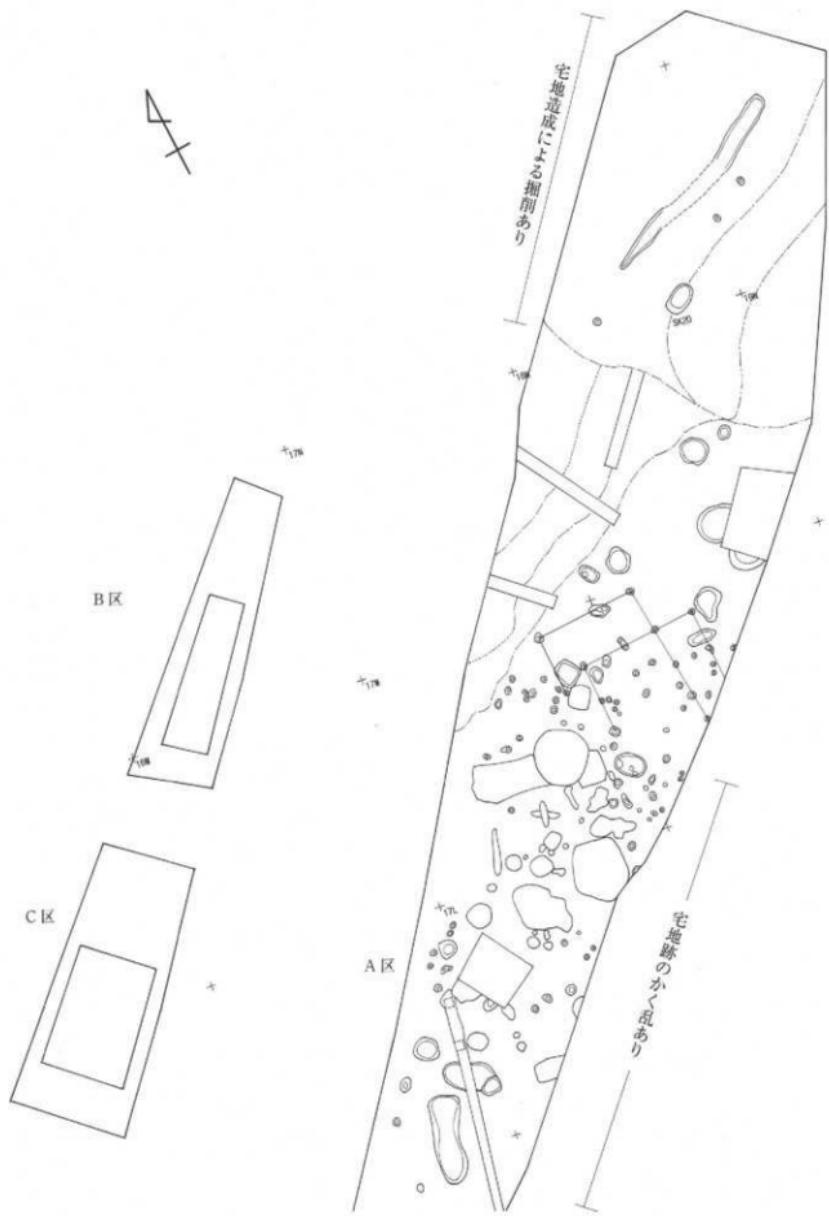
土器

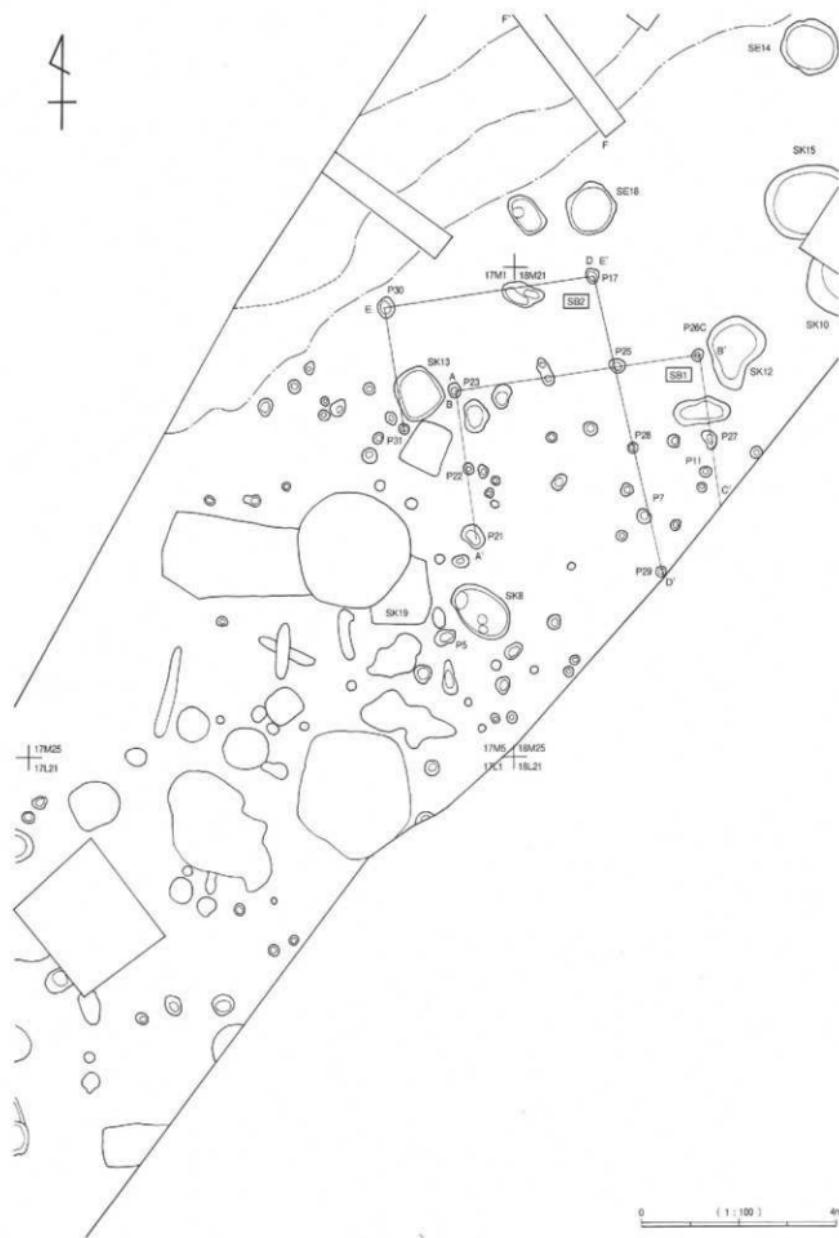
報告 番号	種類	器種	出土位置	遺構種別	部位	法量			残存	色調	備考
						D径(cm)	器高(cm)	底径(cm)			
1 珠洲焼	壺小腹	18 N 15	SK15						破片	灰色	
2 瓢箪形	壺	18 N 15	SK15						破片	灰色	
3 黒色土器	壺	18 N 25	SE18						破片	にがい褐色	
4 中世土器	壺	18 N 25	SE18			126			破片	にがい褐色	
5 珠洲焼	片口鉢	18 O 10	SK20				13		破片	灰色	前田里佐恵
6 土師器	無台碗	14 L 9		■		12	4.5	5.2 3.4	破片	にがい褐色	底部斜切
7 土師器	無台碗	14 L 9		■		13			破片	にがい褐色	
8 土師器	無台碗	16 N 13		■				6 1.2	破片	にがい褐色	
9 土師器	無台碗	16 N 20		■		13			破片	にがい褐色	
10 土師器	壺	18 M 18		■		24			破片	にがい褐色	
11 土師器	壺	16 N 20		■		24			破片	にがい褐色	
12 須恵器	壺	19 O 15		■					破片	灰色	
13 須恵器	壺	16 N 17		■					破片	灰色	
14 須恵器	壺	19 O 15		■					破片	灰色	
15 底輪陶器	碗	18 N 20		■					破片	灰色	
16 青磁	碗	16 N 13		■					破片		
17 青磁	碗	16 N 18		■					破片		
18 青磁	碗	16 N 13		■					破片		
19 白磁	蓋	16 N 18		■		102			破片		
20 白磁	蓋	17 M 12		■					破片		
21 中世土器	壺	15 L 9		■		78	1.8	6 1.3	にがい褐色	底部斜切	
22 中世土器	壺	18 N 21		■				7	破片	にがい褐色	底部斜切 墨痕あり
23 珠洲焼	片口鉢	16 N 13		■						1.3	
24 珠洲焼	壺小腹	17 N 5		■					破片	灰色	
25 珠洲焼	壺小腹	16 N 13		■					破片	灰色	
26 珠洲焼	壺	16 N 2		■					破片	灰色	
27 球形壺	壺	16 N 18		■					破片	褐色	

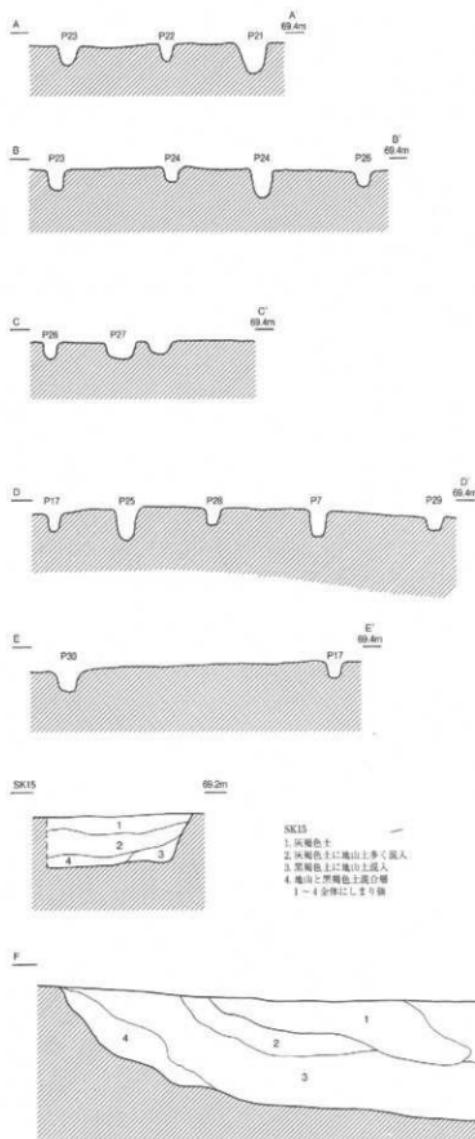
鉄製品ほか

報告 番号	種別	器種	出土位置	遺構種別	部位	法量			色調	備考
						D径(cm)	器高(cm)	底径(cm)		
28 鉄釘			18 N 25	SE18		6.5	0.5	0.5	銀白	
29 鉄釘			18 N 25	SE18		4	0.5	0.4	銀白	
30 鉄釘			18 N 25	SE18		4.1	0.5	0.5	銀白	
31 鉄釘?			18 N 25	SE18		4	0.3	0.3	銀白	
32 鉄釘			18 N 25	SE18					銀白	
33 鋼LJ			17 M 4	P5			内径3		銀白	銅付着
34 鋼LJ			18 N 25	SE18		外径8	内径3		銀白	銅付着
35 磁石			16 N 18			5.8	2.9	0.8	銀白	裏面欠損

図 版

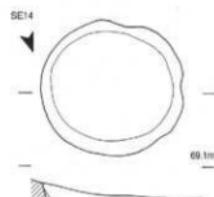




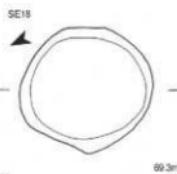


1. 棕褐色土ブロック 厚くしまる
2. 灰褐褐色土 地山乾燥入
3. 黒褐色土
4. 灰黒褐色土に地山砂混入 やや砂質

0 (1 : 80) 4m

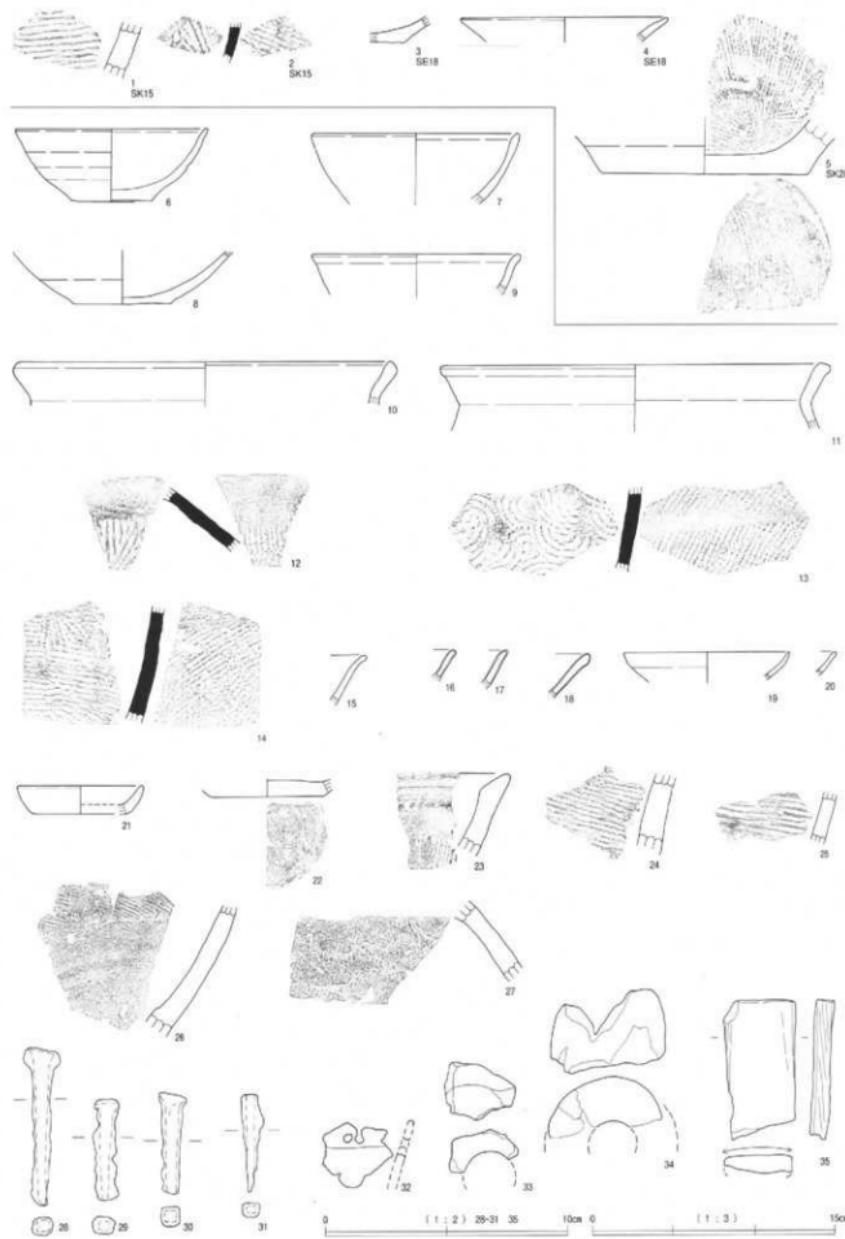


SE14
1. 黑褐色土 (Hor10YR3-1) しまりあり
2. 灰褐色土 (Hor10YR3-1) に地山
乾燥入しまりあり



SE18
1. 棕褐色土 (Hor10YR3-3) しまり
2. 灰褐色土 (Hor10YR3-1) 地山
乾燥入しまりあり
3. 黑褐色土 (Hor10YR3-1) と地山
土ブロック土器片あり

0 (1 : 40) SE14 SE18 SK15 F-F' 2m







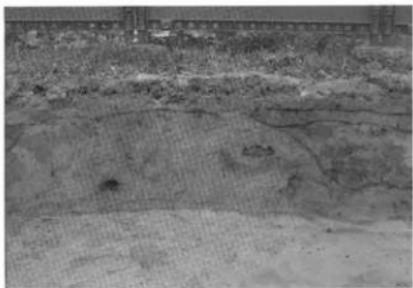
調査前状況 南から



A区作業風景 南から



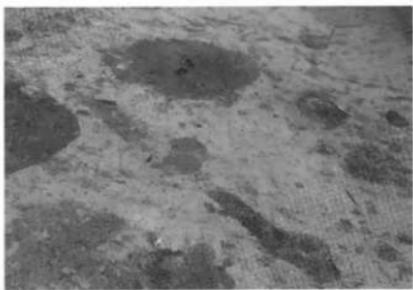
B区調査状況 南から



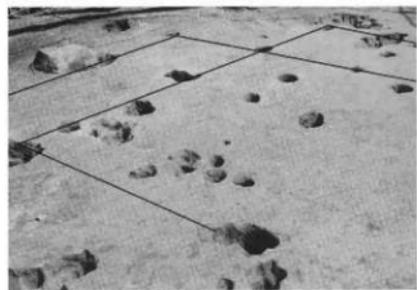
A区基本層序 北西から



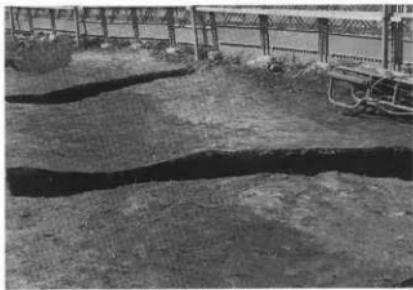
C区基本層序 北西から



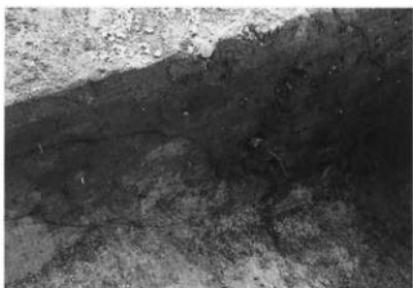
A区宅地跡のかく乱状況 南から



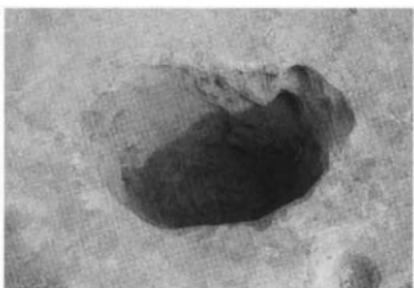
掘立柱建物周辺 南から



褐色土集中区検出状況 東から



F-F' 断面 北東から



Pit5 完掘状況 南から



SK10 断面 北から



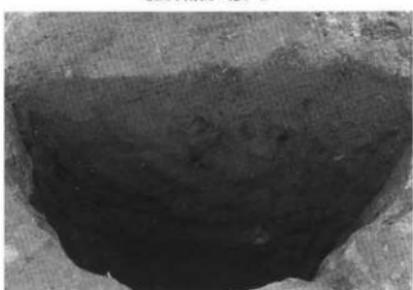
SK15 断面 西から



SE14 断面 北から



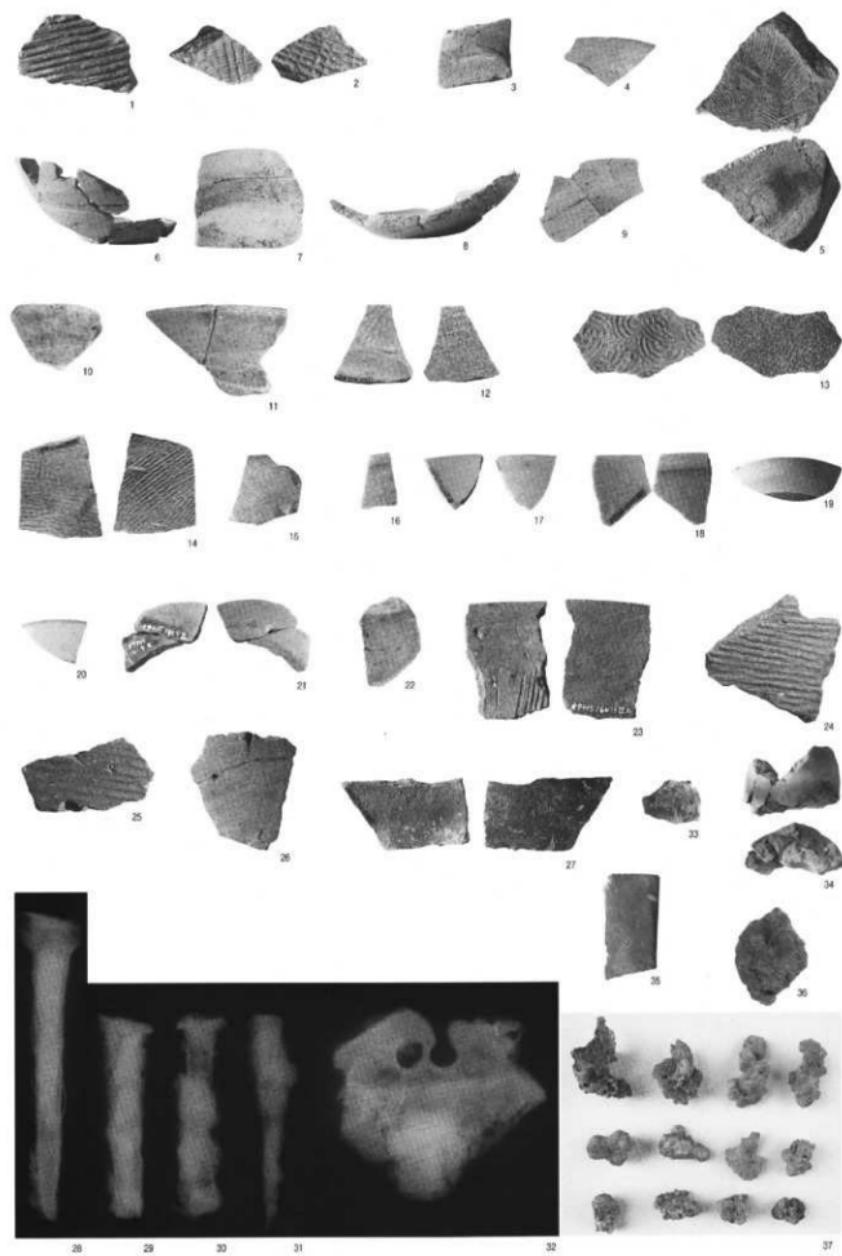
SE14 完掘 北から



SE18 断面 北から



SE18 完掘 北から



報告書抄録

ふりがな	おたてあとさん						
書名	御館跡Ⅲ						
調査名	国道404号関係発掘調査報告書						
シリーズ名	-						
シリーズ番号	-						
編著者名	池田 淳子						
編集機関	長岡市教育委員会						
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市梅原町2・1 Tel 0258-32-0546						
発行年月日	2006(平成18)年3月10日						
所取遺跡名	所在地	コード	調査期間 (新座標)	北緯	東經	調査面積	調査原因
		市町村		遺跡	度		
御館跡	長岡市小国町 千谷沢字鶯之 島居平	15202	559	20050819～ 20051007	37 度 19 分 59 秒	138 度 43 分 35 秒	900 m ² 国道404号 拡幅工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
御館跡	居館 集落跡	平安時代・中世	掘立柱建物、柱 穴、井戸	土器、須恵器、青磁、 白磁、珠洲焼、鉄釘、 鉄鍋、鐵滓など鍛冶関 連遺物			

御館跡Ⅲ 発掘調査報告書

平成18(2006)年3月10日印刷
平成18(2006)年3月10日発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社 第一印刷所 中越支店
〒940-0864

長岡市川崎5丁目442番1号

電 話 0258-34-6300